

# 幼児の動物飼育体験が思いやりの形成に及ぼす影響

## —共感性・向社会的判断の分析を中心として—

人間教育専攻

幼年発達支援コース

安藤 ときわ

指導教員 浜崎 隆司

### 問題・目的

文部科学省(2008)は幼稚園教育要領の領域「環境」の「内容の取扱い」の中で、動物飼育は子どもの心の成長を促すものとして、位置づけている。井戸・桜井・柿沼・高橋(2002)は、動物飼育を通じたコミュニケーションから、動物の立場を理解し、異質な立場の存在や命の尊さを学び、相手への思いやりを培うことにつながっていると示唆している。このように、子どもが動物飼育を行うことで思いやりの形成に影響を及ぼしていることが考えられるが、動物への関わり方やその内容が子どもの思いやりの形成にどのように影響しているかという検討はあまりなされていない。

思いやりのある行動とは向社会的行動(prosocial behavior)と呼ばれているものであるが(菊池,1998),その発達について,Eisenberg&Mussen(1989 菊池他訳 1991)は年長の子は幼い子よりも、適切なやり方で相手を上手に助けることができると述べている。また,朝生(1987)は年長児の方が年少児よりも他者の感情推測(認知)が発達していると指摘している。

以上のことから,本研究では,動物飼育を行っている園と行っていない園の園児の比較,動物飼育を行っている家庭での動物への関わりを程度を比較し,子どもの思いやりの形成に及ぼす影響を検討していく。また,向社会的行動の動機づけの一部として考えられている「共感性」

と自分に向社会的行動が求められているかどうかを判断する「向社会的判断」(菊池,1998)の分析を中心に行う。

### 方法

調査対象者:徳島県内の幼稚園や保育所の5歳児159名とその保護者。

調査時期:2009年7月~10月

調査手続き:誘導係1名が被験児3名を園(所)の一室に誘導し,調査者3名が個別に調査を行った。

#### 1) 共感性テスト

被向社会的行動者や動物の感情を正しく理解しているか否かを測定するテストと被向社会的行動者や動物の感情に対する被験児の代理的感情反応を測定するテストから構成されている。

① “喜び” “悲しみ” “怒り” “普通” の4つの表情カードを言語化できるかどうか確認する。

② 図版の説明をした後,白抜きになった被向社会的行動者や犬の顔を4枚の人間用,犬用表情カードの中から選択させる。

③ 話を聞いてどんな気持ちになったかを尋ね,表情カードから選ばせる。

#### 2) 向社会的判断を測定する尺度

図版の提示と場面選択による幼児の向社会的判断に関する尺度を作成した。図版は先行場面と向社会的行動,非向社会的行動の3枚からなり,様々な状況下での人や動物に対してどちらの対応を選択するかという図版6場面から構成

されている。

### 3) 動物への愛着測定

被験児に「〇〇くん(ちゃん)は動物が好きですか」と聞き、回答を求める。

### 4) 家庭での動物飼育アンケート

保護者への家庭での動物飼育のアンケートを作成し、幼児にアンケートを保護者に渡してもらい回収した。

## 結果

園飼育と家飼育が幼児の思いやりの形成に及ぼす影響を検討した結果、園飼育が幼児の思いやりにおける情動的共感性に影響を及ぼしており、さらに性差を検討したところ、園飼育を行っている男児は園飼育を行っていない男児より情動的共感性が高く、園飼育を行っている男児は女児より情動的共感性が高い傾向にあることが明らかとなった。

家飼育において、動物との関わり方が思いやりの形成に影響を及ぼしていると考え、検討したところ、家での動物の世話を毎日あるいは時々する幼児は、しない幼児より向社会的判断が高くなることが示された。そして、家で動物を自主的に世話している幼児は、言われてもしない幼児より認知的共感性、向社会的判断が高く、動物の世話をするように言われてする幼児は、言われてもしない幼児より向社会的判断が高い傾向にあった。また、家で動物を飼いたいと言った幼児は、保護者が動物を飼いたいと言った幼児より認知的共感性が高いこと、家で動物を飼うことについて話し合う場面に同席している幼児は、話し合いの場面にいない幼児より情動的共感性が高くなることが示唆された。

最後に、動物が好きな幼児は、動物が嫌いな幼児より認知的共感性、向社会的判断が高く、情動的共感性が高い傾向にあった。

## 考察

情動的共感性においては、向社会的行動の媒介過程として共感性の要因が考えられることから、動物飼育により情動的共感性が高まることは、思いやりの形成において重要なことである。幼児を動物飼育に積極的に関わらせることにより、幼児は動物の状態や心情を考える力が養われ、相手が感じている気持ちを共有することができるようになると考えられる。また、飼育動物は守るべき存在であるため、幼児でも容易に優しく接することができる。優しさや思いやりは女性性と考えられるが、思いやり行動を生起させやすい動物に接することで、男児の思いやりや共感性が高められたと思われる。

飼育動物が病気や怪我を負った場合、心配する気持ちから共感が生じ、いたわろう、命を大切にしようという気持ちが身につくのではないだろうか。そして、毎日動物の世話をすることで、動物に対してどういうことをすればいいのだろうと考える機会が増え、思いやり行動をする必要があるという判断ができるようになると考えられる。また、子どもが動物を飼いたいと言うことは、動物への関心があり観察する機会が多くなることが予想され、動物の様子を見ることから相手の考えや気持ちを考えることが身につくのではないか。そう考えると、動物に興味をもたせることが、動物との関わりの一歩であり、重要なことだと思われる。そして、動物を飼う際には子どもに動物の状態や気持ちを想像させるような話し合いを行うことで、相手の心情を考える力が高まることが考えられる。

さらに、動物への正の感情は、動物に関わる機会を増やし、相手の状況や心情を想像する力が培われ、思いやりのある行動ができるようになることが推察される。